

| 会議名 全国自立援助ホーム協議会あり方検討委員会（高機能化・多機能化グループ）第4回 | | | |
|---|--|----|---------------|
| 日時 | 2021（令和3）年 11月1日 10：00～12：00 | 場所 | オンライン（zoom利用） |
| 出席者 役割所属 ※敬称略 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 串間範一（会長/ウイング・オブ・ハート）・前川礼彦（副会長/湘南つばさの家） ・ 恒松大輔（事務局長/あすなろ荘）・松本耕造（副会長/清周寮） ・ 川口充紀（制度政策：長/わだちの家）・内藤直人（調査研究：長/鳥取フレンド） ・ 本間征二（研修：副/KCカルム）・熊沢百恵（広報：副/しおん） ・ 万治貴史（事務局/カリヨンタやけ荘）・合木啓雄（丸亀おひさま荘） ・ 平井誠敏（慈泉寮）・大宮美智枝（エスポワール）・胡内敦司（家庭福祉課） | | |
| 13／名 | | | |
| ○協議内容 | | | |
| ⇒結論（助言や次回以降への課題も含） | | | |
| <p>1、就学支援について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在利用者（入居者）の半分が学籍者（就労兼ねる者も含む）。現状について議論をすることでノウハウを蓄積し、就労支援との課題を整備していく必要がある。 ・ 実施要項上には、就業の支援の表記のみだが、社会のニーズが変遷している。 ・ 「就学」と「修学」両方の支援が必要。 進学が目標でなく、卒業に向けての支援が必要だが、就労との両立は並大抵ではない。 ・ 高卒認定について整理。高校を中退しても時期や単位取得状況次第で認定試験の負担軽減にもつながる。 ・ 奨学金の対象は、自立援助ホーム<児童養護施設であるし、近年競争倍率も上がっている。 ・ 今後、学籍者の割合は増加することが予想される。 ・ 就学支援＝就労支援。中卒と高卒、高等教育卒では生涯賃金に大きな開きがある。 | | | |
| <p>2、就学者に関するアンケートについて</p> <p>a. 実施している支援内容（進学先決定、在学継続・卒業等に係る）の確認。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 塾や学習ボランティアの活用もあるが、職員が学習支援しているホームも少なくない。 <p>⇒高等教育への対応に課題。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習支援の内情は、対人関係や意欲向上に関する支援やスケジュール管理等の支援がメイン。 ・ 学力向上よりは卒業するための支援。 <p>b. 受け入れに関する意向の整理。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 肯定的な意見が多い。社会性を身に付けるうえでも学校は有効。 ・ 中間層も多く、18歳未満は児童養護施設が望ましいという意見も。 ・ キャリア支援には必要だが、就労者との兼ね合いは悩ましい。 ・ 第二種事業の役割、強みは制度の狭間にある利用者のニーズに応えること <p>⇒受け入れていきたい。個別のニーズ。</p> <p>c. ホームにおける就学者支援の実態と考え</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力向上よりは特性に添った個別支援が必要。 ・ 低学力、低意欲の利用者への支援。 ・ 自立に向けては有効である。 ・ 学費の問題は残るし、職員の専門性も十分でない。 ・ ニーズの二極化…高等教育の修学と居場所として就学選択。 | | | |

○実践報告（丸亀おひさま荘、nature）

- ・香川県…児童養護施設が3軒、自立援助ホームが5軒。
- ・法人概要説明。
- ・就労も就学も公平に選択できれば良い。就学率は90%程。
- ・現在の就学支援…公私立、全日定時通信制等形態は様々。
- ・課題…進路決定において自己決定が難しい。親との関係が影響。
学費の支払いなどに関して親子関係調整も必要。
- ・制度の狭間のニーズに応えていくため、今後も運営方法は変動していく。

○実践報告（かりん）

- ・慈泉寮の就学者は就労者との兼ね合いもあつてか、中退者が多かった。
- ・18歳超過ケースを想定するも、18歳未満の相談も含まれた。
- ・障害有するケースも利用、暫定定員の兼ね合いから就労のみのケースも利用している。
- ・現在は4名の内2名が就学者。
- ・今後自立援助ホームが担っていく役割を精査されたい。
- ・児童養護施設との格差を埋めていく必要。

⇒調査に関して

- ・就学者の①入居理由、②年齢（18歳超過・未満）の整理、③中退、の割合等を詳細に把握できれば現状分析する材料になるのではないか。
- ・高校生の進学希望と就職希望の割合もわかると有効か。

○意見交換

- ・就学者を自立援助ホームで受けるべきなのかを議論するのであれば予算要望のあり方にも影響してくる。
- ・18歳成人との兼ね合いもあり、18歳超過ケースの就学支援は積極的に行う等の住み分けも必要となってくるか。
- ・香川県での養育家庭の活用はどうか？

⇒高校生の受け入れが充実していないようだ。

- ・修学旅行が海外のケースがあり、費用面で参加断念したことがあった。
- ・中退率は高い。学び直し、再チャレンジを提案、後押しする際の工夫は？

⇒何度でも失敗して良い。特別育成費があるので機会の提供がしやすくなった。

- ・学習面のサポート…職員の中に教員免許を有している者もいる。
- ・高校生の学習レベルも上がっており、職員だけでは限界がある。
- ・児童養護施設との差別化をどうしていくか議論が必要。
- ・他の施設で不適應になったケース＝自立援助ホームで受け入れ、という流れになるのは望ましくない。
- ・児童相談所も打診する際に施設の差別化ができていた方が良いのではないか。
- ・学習面の専門性だけでなく、学校とも連携して不登校者が学校へ適應できる支援や、将来設計を含めて支援計画の策定をする必要がある。
- ・居住先の施設種別に関係なく、高校生の権利保障はされるべき。
- ・社会的養育全体の課題でもあり、横断的な議論が必要。

○大宮氏（エスポワール）より

- ・高校を中退するようなケースは親への不信感から養育家庭はほぼ拒否。
児童養護施設は学校生活面だけ見ると円満かもだが、それまでの生活で培われたこだわりや常識とのギャップに苦しむこともある。
- ・「親に頼らず生きていくのだ」と切り替えないと前に進めないケースが多い印象。
- ・入居後すぐの無職期間は日課の中で学習（小学校レベルから）のやり直し。四則計算、地図の見方等。
- ・就労体験としてボランティアに派遣。電車の乗り方やあいさつ、履歴書の書き方等を教える。
- ・週1日学習時間を設けてそれぞれの課題（学校のレポート、自動車免許、調理等）に取り組む。
- ・まだ数は少ないが、単位を落としたり、進級できなかつたりしたケースはない。
- ・卒業までの時間の保障ができる。その間に様々なことを伝えられる。
- ・大学と連携して学習ボランティアの確保。
- ・ポストドクターの活用。相互にメリットがあった。
- ・高等教育への進学に関して、協議会（各ブロック毎でも）にガイダンスカウンセラーの配置を薦める。制度の変遷や学科毎への助言に対応できる専門的な支援が必要。

○胡内氏より

- ・児童養護施設に入所できなかった児童がファミリーホームや自立援助ホームに流れている。
- ・それぞれの施設の対象、役割について議論を重ねる必要がある。
- ・利用者のニーズは社会環境によって大きく変容するため、都度柔軟な対応は必要。
- ・就労支援も就学支援も利用者の自立に向けての支援である。
- ・各自治体の児童相談所の意向や方針の確認や議論も必要。

次回 2021（令和3）年 12月6日（月）10:00～12:00